

卒業生数と卒業生の進路

100年間の学部卒業生の総数は1,636名にのぼり、毎年20～30名の卒業生を社会に送り出している。学生数の動向としては、学部生において少しずつではあるが、女子学生数が増えつつあり、大学院においては、修士課程の大学院生数が増加傾向にある。博士課程では留学生を含め、各学年3～5名が在籍しており、学位を取得している。

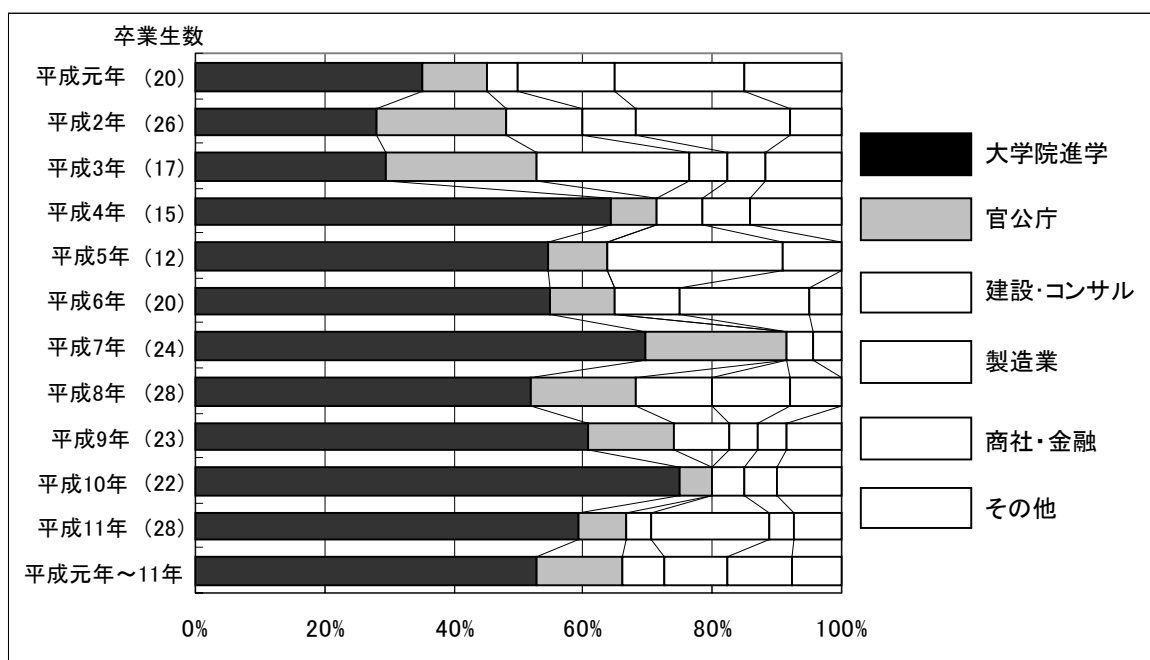
平成元年以降の学部卒業生の進路では、大学院への進学者数が53%と目立ち、農林水産省を中心とした中央官庁や県庁などの地方自治体13%、食品関係などの製造業10%そして商社・金融業10%、建設業・コンサル6%の割合になっている。また放送局・出版などのマスコミ、情報関連企業への就職も見られる。

修士課程修了生の進路においては、博士課程への進学が41%と最も多く、農業機械や食品関係の製造業24%、農林水産省を中心とした中央官庁13%、建設業・コンサル7%となっており、民間シンクタンクへの就職も多い。

当分野の学部卒業生および大学院修了生ともに、幅広い業種から活躍の場が与えられており、多くの分野において社会貢献を行っている。

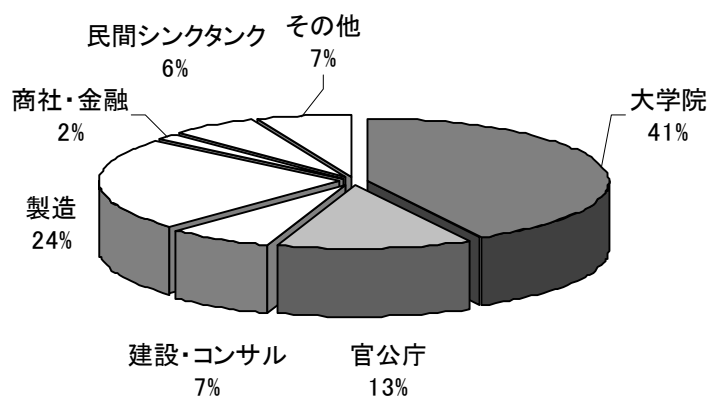
卒業年	学部卒業生 ():内女子学生数			大学院修了・論文博士 ():内留学生数		
	農業土木学専修 地域環境工学専修	農業機械学専修 生物システム工学専修	合計	修士課程	博士課程	論文博士
昭和60年	19	8	27	2(1)	0	3
昭和61年	14	9	23	6(1)	3	17
昭和62年	17	10	27	6(1)	0	8
昭和63年	14	8	22	4(1)	3(2)	9
平成元年	13	7	20	6	5(4)	7
平成2年	19	7	26	8(2)	3(1)	15
平成3年	13	4	17	9(2)	5(4)	9(1)
平成4年	6(1)	9(1)	15	8(1)	3	11
平成5年	6	6(1)	12	11	2(2)	2
平成6年	10	10	20	15(2)	4(2)	2(1)
平成7年	11	13(1)	24	11(2)	3(3)	11
平成8年	17	11	28	12(1)	5(3)	3
平成9年	12	11	23	19(2)	5(3)	7(1)
平成10年	13	9(2)	22	15	4(2)	5
平成11年	12	16(2)	28	13	4(2)	1

学部卒業生の進路（平成元年以降，各年の割合）



- 官公庁： 農林水産省，建設省，郵政省，鹿児島県庁，岐阜県庁，静岡県庁，福岡市役所，横浜市役所，日本道路公団，JICA，水資源開発公団 など
- 建設・コンサルタント： 鹿島建設，大成建設，戸田建設，西松建設，間組，東急不動産，アンダーセンコンサルタント，等松トウシュロスコンサルティング など
- 製造業： アサヒビール，味の素，池田ワイナリー，遠藤照明，クボタ，小松製作所，サッポロビール，住友電工，東芝，同和鋳業，日本IBM，日本電気，日清製粉，日新精糖，ネスレ日本，富士通，三菱自動車工業，山崎製パン など
- 商社・金融業： 伊藤忠商事，日商岩井，丸紅，三井物産，三菱商事
あさひ銀行，足利銀行，さくら銀行，三和銀行，住友銀行，東海銀行，農林中央金庫，三井信託銀行，安田信託銀行，第一生命保険，安田海上火災 など
- その他： 家の光協会，NTT，海外経済協力基金，数理システム，全国農業協同組合，大和総研，東京電力，東京放送，日本技研，日本航空，野村総研，博報堂，東日本病院協会，布教師，富士通 BSC，理化学研究所，リクルート など

修士課程修了生の進路（平成元年以降の累積数割合）



官公庁：農林水産省，特許庁など

建設・コンサル：鹿島，大成建設，日本工営など

製造業：クボタ，東芝，日本たばこ産業，雪印乳業など

商社・金融：安田海上火災，ダイエーフアインランスなど

民間シンクタンク：三菱総研，野村総研，CRC 総研，三和総研など

その他：JR 貨物，NHK，日本 LCA など

竹中賞受賞者

1984年5月に現職教授のまま急逝された竹中肇先生のご遺族からの同窓会へのご寄付をもとに竹中基金を創設した。農業工学同窓会では，当初は留学生への奨学金貸与等の事業を企画していたが，1991年に優秀な学部学生を表彰する「竹中賞」を創設した。これを受け，毎年3月の卒業式の日，農業工学科卒業生のうち最優秀の学生を表彰し記念品を贈呈している。農学部では1996年に学科制から課程・専修制に移行したことから，1998年の卒業生からは，地域環境工学専修・生物システム工学専修それぞれの最優秀学生を表彰している。

卒業年		受賞者氏名	
第1回	1992年	市場潤一	
第2回	1993年	石川英一	
第3回	1994年	藤田 覚	
第4回	1995年	和泉 徹	
第5回	1996年	仲家新太郎	
第6回	1997年	東坂昌輝	
第7回	1998年	岩佐和人	松島 良
第8回	1999年	岡本英二	荒瀬 寛
第9回	2000年	飯塚史生	合田智宏

< 編集後記 >

印刷原稿がほぼ仕上がり、やっと編集後記を書くことができるという安堵感が、今の心境である。振り返れば、本年3月末の第1回記念行事実行委員会で記念誌の編集担当を依頼され、12月の発行に向けて作業を開始した。短い期間で、過ぎ去りし100年を記録し、来るべき100年を展望する記念誌を作るという重責を果たすことができるのだろうか、というのが当初からの基本的な疑問であり、不安材料であった。

内容を企画するのに先だって類似の記念誌を収集した。幸い我々には学科創立80周年に発行された記念誌があった。ハードカバーの立派なもので、農業工学科の80年間の歴史が詳細に記録されている。この誌面は本誌の内容を企画する上で大きい助けになったが、一方で逆に本誌の構成に制限を与えるものでもあった。学科創立80周年と学問分野生誕100周年は、ほぼ重なっている。今我々が100年史を作っても、80周年記念誌以上のものはとてもできないと思われた。6月2日に開いた第1回編集委員会では本誌の企画構成が検討され、まずこのことが議論された。結果としてまとめられた案は、本誌を3章から構成すること、1章は歴史、2章は恩師と先輩方からの原稿、3章は現教官と在学生による将来展望を主として記載することとした。この会議で、80周年記念誌を比較対照とするのは止そうということで委員の意思統一をし、自ら肩の荷を下ろした。

本誌を作るにあたっては、記念行事を主催する東京大学生物・環境工学専攻の構成員以外にも多くの方々の協力を得た。東京大学農学生命科学研究科の林良博研究科長、日本農業工学会の木谷収会長には祝辞をお願いしたところ、大変ご多忙にもかかわらず快諾していただき感謝申し上げます。

本誌の第1章では80周年以後、特に大学院重点化に伴う変遷を中心に記述することにしたが、100年史である以上それまでの歴史も含めて記録する必要がある。この部分では随所で80周年記念誌を引用、参照させていただいた。この場を借りて事後承諾をお願いするとともに、すばらしい記念誌を制作された恩師、先輩方に改めて尊敬と感謝の意を表したい。

第2章では、恩師と専攻外の実行委員の方々に寄稿をお願いした。また毎年会報でお世話になっている同窓会の年次委員の方々に寄稿をお願いするとともに、同級生の方に原稿執筆を依頼させていただいた。多くの方々から寄せられた玉稿を拝見して、100年間の学問の発展と社会への貢献に支えられて今日ある、我々の立場の責任の重さを身にしみている次第である。年次委員と、ご執筆いただいた方々に謝意を表するとともに、今後も変わることなくご指導ご鞭撻いただくことをお願いしたい。

第3章は教官と学生の方々の原稿により構成した。当専攻と関係の深い他専攻教官の方々にも執筆していただき感謝申し上げます。社会の移り変わりは益々激しくなっており将来を予想することは難しいが、新世紀を迎えるにあたり、ひとつの区切りとして各研究室の今後の目標と展望を記載した。在学生には専攻の一員として、忌憚のない率直な文章を書いてもらうことにした。本誌は在学生と、今後数年間に進学して来る学生全員に配布される。本誌が来世紀の学問を拓く学生の、学習や研究のモチベーションのひとつになれば、編集者としてうれしい限りである。

本誌は専攻の同窓会である東京大学紫工会の援助を受けて発行される。紫工会の関係各位に、記して深謝の意を表する。
(芋生憲司 記)

編集委員名簿

編集委員長 芋生憲司

編集委員 中野政詞、宮崎 毅、山路永司、沖 一雄、石川雅也
酒井一人、関 勝寿、海津 裕、川越義則、清水 庸